

家庭生活についての全国調査 東北データの分析 (第4報) — 高校生の自立と家庭生活に対する意識・意欲との関連性 —

高木 直^{*1}, 大森 桂^{*1}, 中屋紀子^{*2}, 長澤由喜子^{*3},
浜島京子^{*4}, 黒川衣代^{*5}, 渡瀬典子^{*3}, 砂上史子^{*6}

^{*1} 山形大学教育学部, ^{*2} 宮城教育大学, ^{*3} 岩手大学教育学部,
^{*4} 福島大学教育学部, ^{*5} 秋田大学教育文化学部, ^{*6} 弘前大学教育学部

Survey on Children's Consciousness and Behavior
in Family Life: Analysis of the Data in the Tohoku District (4)
- Relationships between Autonomous Ability and Consciousness
about Family Life of Senior High School Students -

Nao TAKAGI, *Faculty of Education Yamagata University*
Katsura OMORI, *Faculty of Education Yamagata University*
Noriko NAKAYA *Miyagi University of Education*
Yukiko NAGASAWA *Faculty of Education, Iwate University*
Yukiko HAMAJIMA *Faculty of Education, Fukushima University*
Kinuyo KUROKAWA *Faculty of Education and Human Studies, Akita University*
Noriko WATASE *Faculty of Education, Iwate University*
Fumiko SUNAGAMI *Faculty of Education, Hirosaki University*

1. はじめに

日本家庭科教育学会が2001年に実施した「家庭生活についての調査」¹⁾について、東北地区では地区の特徴を明らかにし、今後の家庭科教育に生かすことを目的として独自にデータを分析し、これまで3報にまとめ報告している。本報は、対象を高校生に絞り、生活の自立状況と家庭生活に対する意識や意欲との関連性を分析し、子どもの生活的自立を促す

ことの重要性を実証的に明らかにし、今後の家庭科教育への示唆を得ることを目的とする。高校生を対象とした理由は、全国データとほとんど差がない中で、問4-1の生活の自立に関する設問において「家族の夕食を作る」の実践率が東北の高校生女子で高く、男女差も大きかったことに注目し、東北の高校生の自立の実態およびそれに関連する因子を詳細に分析することにより、今後の家庭科教育への重要な示唆が得られるのではないかと考えたためである。

(受付 2004 年 4 月 19 日 / 審査終了 2004 年 4 月 28 日)
〒 990-8560 山形市小白川町 1-4-12 山形大学教育学部

2. 方法

(1) 対象

日本家庭科教育学会の行った全国調査を含め、東北独自の調査計画によって得たデータのうち、本報で分析の対象とした調査項目全てに回答した生徒、1,291人（男子588人、女子696人、性別不明7人）を対象とした。

(2) 調査項目および分析方法

本報で分析の対象とした調査項目を表1に示す。

まず問4-1の生活の自立に関する18項目の回答をもとに生徒の自立度を評価した。つぎに、問4-2「もっと上手に出来るようになりたいと思うこと」、問4-4「もっとすすんでするようにしたいと思うこと」において、生徒の選択した項目数を1項目1点として得点化し、技能習得意欲得点、対人関係や地域環境に対する改善意欲得点とした。

また、問10-1の家庭の働き（役目）として大切だと思ふ項目を複数選択させた設問において、生徒の選択した項目数を1項目1点として得点化し、家庭生活に対する価値観得点とした。さらに、問10-3において「家庭生活を明るく楽しくするために自分ができることのうち、一番大切だと思うこと」として生徒の選択した項目により、生徒の家庭生活に対する参加意欲を評価した。(1)～(3)を選択した生徒を「積極派」、(4)～(6)を選択した生徒を「消極派」、(7)を選択した生徒を「その他」とした。

以上の項目を用い、自立度の高さにより技能習得意欲、対人関係や地域環境に対する改善意欲、家庭生活に対する価値観、家庭生活に対する参加意欲に違いがみられるか分析を行った。

表1 調査項目

<生活の自立度>

問4-1 あなたは、次のことをどれくらいしていますか。「いつもする」から「しない」まであてはまる番号を1つずつ選んで、数字に○をつけて下さい。

- (1) ほうちようで食べ物を切る
- (2) 食器を洗う
- (3) フライパンやなべを使って料理する
- (4) 家族の夕食を作る
- (5) せんたく機で衣服のせんたくをする
- (6) せんたくものをたたむ
- (7) ボタンのとれた時に、ボタンをつける

- (8) 季節や気候にあった服装を自分できめる
- (9) パソコンを使って暮らしの情報を集める
- (10) へやをそうじして、きれいにする
- (11) 家族にたのまれた買い物をする
- (12) すごしやすくなるように、へやの温度や空気を調節する
- (13) ゴミを決められた方法で出す
- (14) 電気や水を使いすぎないように、注意やくふうをする
- (15) 包装や入れ物がゴミになりにくい物を選んで買う
- (16) 近所の人にあいさつをする
- (17) お年寄りや体の不自由な人に声をかけたり手助けをする
- (18) 子どもの遊び相手をする

<技能の習得意欲>

問4-2 次のことで、もっと上手に出来るようになりたいと思うことの番号に○を付けて下さい。(複数回答)

- (1) ほうちようで食べ物を切る
- (2) 食器を洗う
- (3) フライパンやなべを使って料理する
- (4) 家族の夕食を作る
- (5) せんたく機で衣服のせんたくをする
- (6) せんたくものをたたむ
- (7) ボタンのとれた時に、ボタンをつける
- (8) 季節や気候にあった服装を自分できめる
- (9) パソコンを使って暮らしの情報を集める
- (10) この中にはない

<対人関係や地域環境に対する改善意欲>

問4-4 次のことで、もっとすすんでするようにしたいと思うことの番号にいくつでも○を付けて下さい。(複数回答)

- (1) へやをそうじして、きれいにする
- (2) 家族にたのまれた買い物をする
- (3) すごしやすくなるように、へやの温度や空気を調節する
- (4) ゴミを決められた方法で出す
- (5) 電気や水を使いすぎないように、注意やくふうをする
- (6) 包装や入れ物がゴミになりにくい物を選んで買う
- (7) 近所の人にあいさつをする
- (8) お年寄りや体の不自由な人に声をかけたり、手助けをする
- (9) 子どもの遊び相手をする
- (10) この中にはない

<家庭生活に対する価値観>

問10-1 家庭には、次のような働き（役目）があります。あなたが大切だと思うものの番号に○を付けて下さい。(複数回答)

- (1) 子どもを生み育てる
- (2) 寝たり休んだりする
- (3) 夫婦がいっしょにくらす
- (4) ぐらしに必要なものがある
- (5) ぐらしに必要なお金がある
- (6) 子どもをよい人間に育てる
- (7) その家の習慣を受けついでいく
- (8) 老人や病人などが守られる

- (9) 家族みんなが楽しくくらす
- (10) 近所の人や友達などつきあう
- (11) その他

<家庭生活に対する参加意欲>

問10-3 家庭生活を明るく楽しくするため、あなたが
できることのうち、一番大切だと思うものを1つ選んで、
番号に○を付けて下さい。

- (1) 家庭の仕事を受け持つ
- (2) 家族と話し合う
- (3) 家族といっしょに行動する
- (4) 病気にならないように気をつける
- (5) わがままを言わないようにする
- (6) わからない
- (7) その他

入れ物がゴミになりにくい物を選んで買う」(男子3.2%, 女子4.5%), 「お年寄りや身体の不自由な人に声をかけたり手助けをする」(男子5.3%, 女子4.7%), 「家族の夕食を作る」(男子1.7%, 女子5.5%)であった。

ほとんどの項目において男子の実践率は女子に比べて低く、特に「食器を洗う」「ボタンのとれた時に、ボタンをつける」といった食生活および衣生活における基本的な自立の男女差が顕著であった。

次に、表2に示したように問4-1の18項目のうち衣食の自立に関する(1)~(8)の計8項目、社会的自立に関する(13)~(18)の計6項目を取り上げ、各項目において「いつもする」または「ときどきする」に○印をつけた数を調べ、○印1つにつき1点を与えて得点化し、「衣食の自立」得点、「社会的自立」得点とした。また18全項目の得点の合計を「生活の自立」得点とした。これらの得点を生徒の「自立度」の指標とし、得点の分布状況と平均値を考慮して3群(高群, 中群, 低群)に分類した。高群, 中群, 低群の構成比を図1に示す。

3. 結果および考察

(1) 東北の高校生の自立の実態

問4-1の18項目について、「いつもする」と回答した生徒の割合を表2に示す。実践率の最も高かった項目は、「季節や気候にあった服装を自分できめる」(男子73.6%, 女子88.9%)であった。一方、男女いずれにおいても実践率の低い項目は「包装や

表2 問4-1<生活の自立度>において、「いつもする」と回答した生徒の割合

項目	男子	女子	
衣食の自立	(1) ほうちょうで食べ物切る	5.4	12.8
	(2) 食器を洗う	7.5	20.7
	(3) フライパンやなべを使って料理する	6.6	11.9
	(4) 家族の夕食を作る	1.7	5.5
	(5) せんたく機で衣服のせんたくをする	7.5	15.1
	(6) せんたくものをたたむ	5.3	13.2
	(7) ボタンのとれた時に、ボタンをつける	4.4	18.8
	(8) 季節や気候にあった服装を自分できめる	73.6	88.9
生活の自立	(9) パソコンを使って暮らしの情報を集める	7.8	5.2
	(10) へやをそうじして、きれいにする	21.8	20.0
	(11) 家族にたのまれた買い物をする	14.3	16.1
	(12) すごしやすくなるように、へやの温度や空気を調節する	43.5	40.4
	(13) ゴミを決められた方法で出す	24.8	29.0
	(14) 電気や水を使いすぎないように、注意やくふうをする	14.8	18.5
社会的自立	(15) 包装や入れ物がゴミになりにくい物を選んで買う	3.2	4.5
	(16) 近所の人にあいさつをする	28.7	43.5
	(17) お年寄りや体の不自由な人に声をかけたり手助けをする	5.3	4.7
	(18) 子どもの遊び相手をする	12.6	15.9

(%)

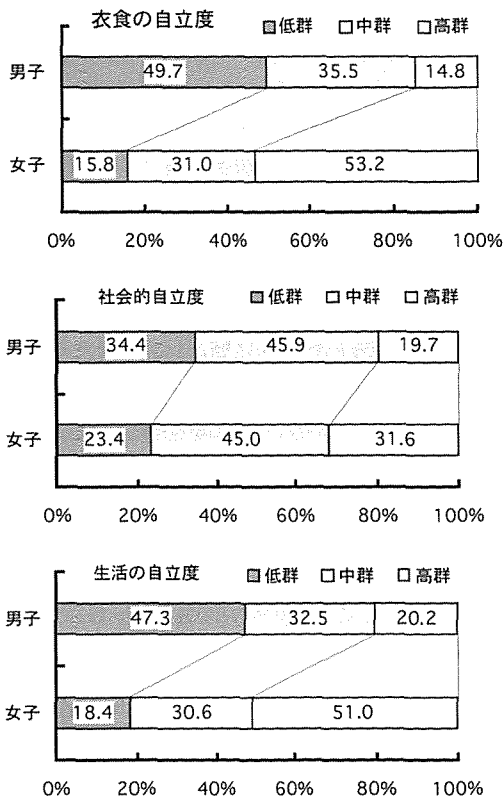


図1 自立度3群の構成比

「衣食の自立度」「社会的自立度」「生活の自立度」いずれも、女子においては高群に分類される生徒の割合が高く、逆に男子においては低群に分類される生徒の割合が高かった。特に「衣食の自立度」の男女差は大きく、女子の53.2%が高群であるのに対し、男子の49.7%は低群に分類された。この男女差は、家庭における性別役割分業意識が依然として強いことを示していると同時に、家庭科教育の課題を示唆していると思われる。

一方、「社会的自立度」は「衣食の自立度」に比べて男女差は大きくない。しかし、高群に分類された生徒の割合は、女子31.6%、男子19.7%と「衣食の自立度」に比べて低く、男女いずれも中群に分類される生徒が最も多かった。人々が互いに助け合いながら環境に配慮した生活を実践する上で社会的自立は欠かすことのできないものであり、衣食の自立と同様、今後家庭科教育において社会的自立に関する

内容をさらに充実させる必要があると思われる。

(2) 自立度と技能の習得意欲との関連

自立度の高群、中群、低群間で技能習得意欲得点に違いがみられるか検討した。結果を図2に示す。「衣食の自立度」と技能習得意欲との関連においては、低群の得点が最も高く（男子2.7点、女子3.1点）、低群から高群にかけて右下がりのグラフと

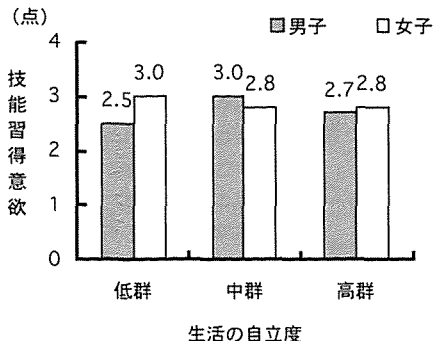
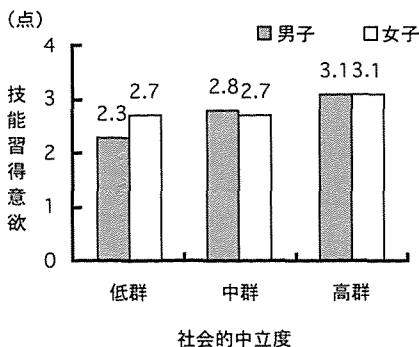
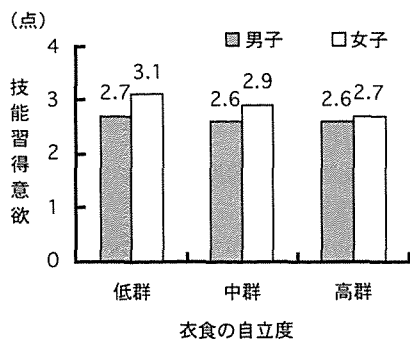


図2 自立度3群別の技能習得意欲得点の平均値

なった。このことから、「衣食の自立度」の低い生徒ほど食生活や衣生活、パソコン等に関する技能の習得意欲の高いことが示された。「衣食の自立度」の項目は技能を伴うため、生徒は日頃自立できていないと感じる場面が多々あり、技能を身につけたい、または身につけなければと考えていると推察される。衣食に関する自立度の低い生徒にとって、生活に必要な技能の習得は家庭科を学習する動機付けとして有効に働くのではないかと考えられる。

一方、「社会的自立度」と技能習得意欲との関連においては、高群の得点が最も高く（男女いずれも3.1点）、低群から高群にかけて右上がりのグラフとなり、「衣食の自立度」とは逆の結果となった。「社会的自立度」は他者や地域環境とより良い関係を築くことに関わる項目が多く含まれており、これらが実践できている生徒は技能習得意欲も高く、逆に実践できていない生徒は技能習得意欲も低いという結果であった。このことから、他者を思いやり、地域環境に配慮する意識を育むことにより、生徒の技能習得意欲を引き出すことができると考えられる。

(3) 自立度と対人関係や地域環境に対する改善意欲との関連

図3に自立度3群別の改善意欲得点の平均値を示す。「衣食の自立度」「社会的自立度」「生活の自立度」いずれにおいても、低群から高群にかけて右上がりの傾向を示すグラフとなった。すなわち、自立度の高い生徒ほど対人関係や地域環境をより良くしようとする意欲の高いことが分かった。

以上、自立度と技能習得意欲および対人関係や地域環境に対する改善意欲との関連を検討した結果、「社会的自立度」の高い生徒は技能の習得や生活改善に対する意欲の高いことが明らかとなった。このことから、生活をより良くしようとする実践力を育成するためには、生徒の社会的自立を促すことが重要であり、家庭科において社会的自立に関する学習内容・方法を今後さらに検討する必要があると思われる。また、「衣食の自立度」の低い生徒ほど技能習得意欲は高かったことから、生徒の衣食の自立において、家庭科における実践的・体験的学習の意義は大きいといえる。しかしながら、衣食の自立におけ

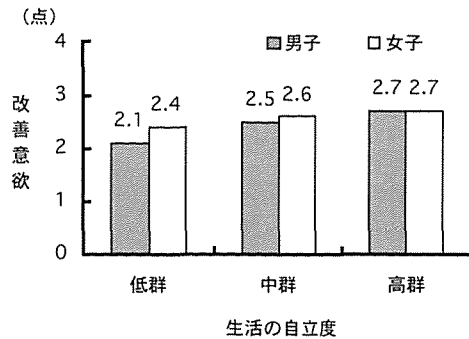
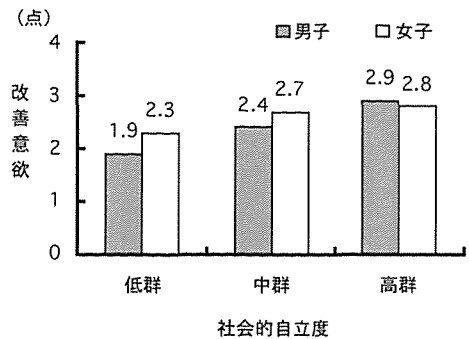
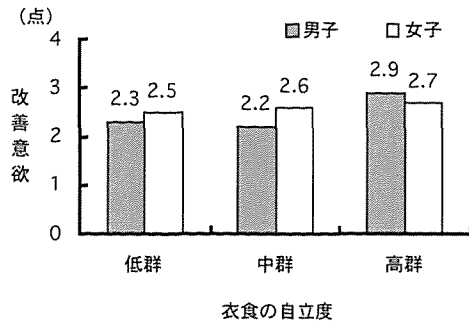


図3 自立度3群別の対人関係や地域環境に対する改善意欲得点の平均値

る男女差は依然として顕著であったことから、特に男子に対して自立を促すという視点から衣食に関わる実践的・体験的学習の効果的な導入方法について今後さらに検討する必要があると思われる。

(4) 自立度と家庭生活に対する価値観との関連

自立度3群別の家庭生活に対する価値観得点の平均値を図4に示す。「社会的自立度」の低群、中群、高群間に明確な得点差がみられ、低群（男子5.0点、女子5.1点）から高群（男女いずれも6.3点）にかけ

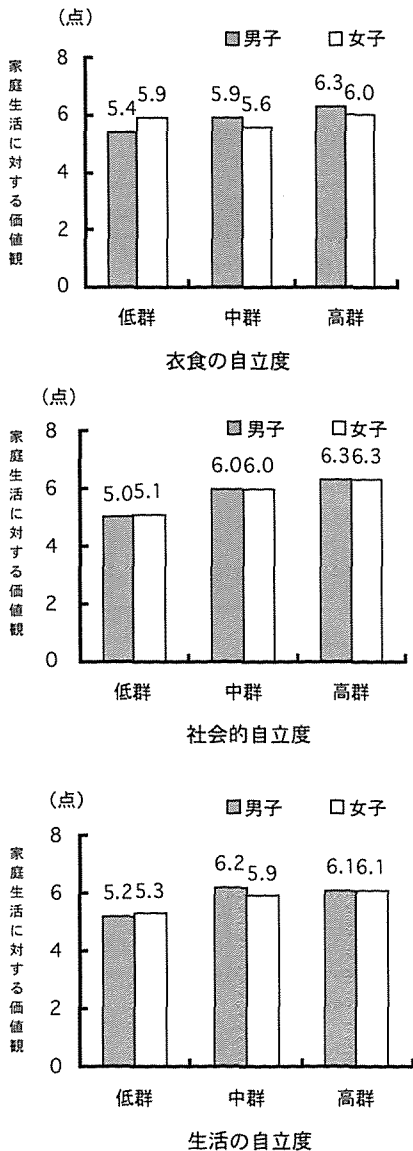


図4 自立度3群別の家庭生活に対する価値観得点の平均値

で右上がりに得点が高まっていた。さらに、この傾向は男女でほぼ同じであった。このことから、男女いずれにおいても、社会的に自立している生徒は、家庭生活に対する価値観得点が高く、すなわち家庭生活に対してより多様な価値を認めていることが明らかとなった。「衣食の自立度」や「生活の自立度」についても、低群の得点が低く、高群の得点が高い

様子は見受けられるが、「社会的自立度」に比べて群間の得点差は明確ではなく、このことから、生徒が家庭生活に多様な価値を見出し、家庭生活をより良くしようとする意欲を育むためには、社会的に自立していることが重要といえる。

(5) 自立度と家庭生活に対する参加意欲との関連
 家庭生活に対する参加意欲について3タイプに分類した結果、「積極派」55.3%、「消極派」39.7%、「その他」5.0%であった。男女いずれにおいても「積極派」が過半数を占めており(男子53.6%、女子56.9%)、家庭生活を明るく楽しくするために積極的に関わろうとする意識をもつ生徒の多いことが明らかとなった。しかし、消極派の割合も決して低くはなく(男子42.2%、女子37.6%)、回答の内訳をみると、家庭生活を明るく楽しくするために何をしたらよいか「わからない」という生徒は男子14.6%、女子12.8%、「わがままを言わないようにする」という生徒は男子12.2%、女子13.9%であった。

次に、「積極派」と「消極派」の自立度3群の構成比を比較した(図5)。いずれのケースも「積極派」は「消極派」に比べて自立度の高群の割合が高く、低群の割合が低かった。また「衣食の自立度」よりも「社会的自立度」において、「積極派」と「消極派」との間の差は大きかった。以上のことから、生活の自立度と家庭生活に対する参加意欲には関連のあることが明らかとなり、特に社会的な自立は、家庭生活を明るく楽しくするために積極的に関わろうとする意識の涵養にとって重要な要素と考えられる。

以上、自立度と家庭生活に対する価値観および参加意欲との関連を分析した結果、生徒が家庭生活の多様な働きを理解し、家庭生活を明るく楽しくするために積極的に関わろうとする意識を持つことは、生活の自立度、特に社会的にどの程度自立しているかが関わっていることが明らかとなった。従来家庭科教育において、生活に必要な基礎的な知識や技術の習得を図り、生徒の衣食の自立を促すことは重視されてきた²⁾³⁾。しかし、今回の分析により、家庭生活の向上に積極的に取り組む姿勢を育むためには、衣食の自立だけでなく、社会的な自立を促すことも重要であることが示唆された。

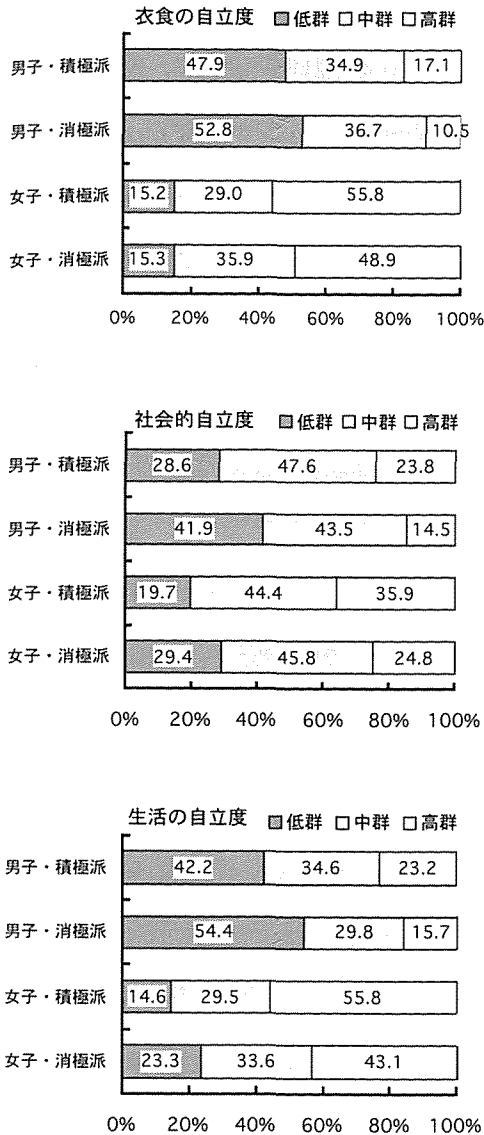


図5 家庭生活に対する参加意欲の「積極派」と「消極派」の自立度3群の構成比

4. まとめ

本報では、日本家庭科教育学会の行った全国調査を含め、東北独自の調査計画によって得たデータの中から高校生を対象を絞り、生活の自立度と技能習得意欲、対人関係や地域環境に対する改善意欲、家

庭生活に対する価値観、家庭生活に対する参加意欲との関連を分析した。その結果、以下のことが明らかとなった。

(1) 「衣食の自立度」「社会的自立度」「生活の自立度」いずれも、女子においては高群、男子においては低群の割合が高く、特に「衣食の自立度」に顕著な男女差がみられた。

(2) 「衣食の自立度」の低い生徒ほど食生活や衣生活、パソコン等に関する技能の習得意欲は高かった。また、自立度の高い生徒ほど対人関係や地域環境をより良くしようとする意欲が高かった。

(3) 男女いずれにおいても、「社会的自立度」の高い生徒は、家庭生活に対する価値観得点が高く、家庭生活に対してより多様な価値を認めていることが明らかとなった。

(4) 生活の自立度と家庭生活に対する参加意欲には関連が認められ、特に社会的な自立は、家庭生活を明るく楽しくするために積極的に関わろうとする意識の涵養にとって重要であることが示唆された。

今回 1,200 名以上の東北の高校生のデータを分析したことにより、生徒が家庭生活の改善に主体的に取り組む姿勢を育むためには、衣生活や食生活に関する基本的な自立が必要であるだけでなく、社会的にも自立することが重要であることが実証的に明らかにされた。今後の研究課題として、高等学校以前の学校段階における自立度と家庭生活に対する意識や意欲との関連を明らかにし、特に社会的な自立を促すために発達段階に応じた効果的な家庭科の学習内容・方法について検討する必要がある。

本論文を執筆するにあたり、データの集計にご協力頂きました山形大学教育学部4年高橋美絵さんに心から感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 日本家庭科教育学会. 児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築—家庭生活についての全国調査の結果—。平成13年度科学研究費基盤研究(A)(1)研究報告書, 2002, 212p
- 2) 日本家庭科教育学会. 児童・生徒の発達と家庭科教育(2) 現代の子どもたちは家庭生活で何

高木他：家庭生活についての全国調査（第4報）

ができるか。東京，家政教育社，1985，171p

3) 日本家庭科教育学会東北地区会。これからの家

庭生活技術—子どもの実態と家庭科をめぐって

一。福島，大盛堂印刷所出版部，1986，155p